

研修員に聞く—お国自慢あれこれ



ラヒール・アーマド・シディッキさん
(パキスタン・イスラム共和国)

Ms. Raheel Ahmad Siddiqui

パキスタン、パンジャブ州財政企画部行政官。国際協力事業団北海道国際センター(札幌)「パキスタン民主化支援」コース(2002年1月14日~2002年2月20日)で研修。



長男ダニー君の通う私立学校で



地方自治のための人材づくり

民政移管が進められているパキスタンでは今後、行政機構の整備・確立を担う人材の育成が求められている。パンジャブ州政府の総務局次官補佐を務めていたラヒールさんは現在は中西部の山麓の拠点都市であるデラ・ガジ・カーン市駐在の財政企画行政官として自治体予算の決定、地域の産業促進、部族自治区の開発などの責任を負っている。札幌市と共同で実施されたこのコースは中央や地方政府の行政官を対象として開設され、パンジャブ州やラホール州から5名が参加した。地方自治制度、財政制度、選挙制度などに関する知識を深め、「故国での公共事業や様々な企画に役立てたい」と熱心に研修した。

パキスタンの国土面積は79万6千平方キロメートル(日本の約2倍)、人口は1億4300万人。

パンジャブ州の山岳部を担当

パキスタン全土は気候・風土の違いから4つの地方に大別される。ヒマラヤやカラコルムに続く北部地区は気候も温暖で風光明媚。トレッキングなどの観光客に人気がある。反対に気温の高い地域は南部、インダス河の河口からラホールに至るスィンド地方。さらにイラン、アフガニ

スタンと接する高原地帯、バローチスタン。そして首都イスラマバードをはじめ、ペシャワール、ラウルピンジールなど大きな都市が続く中間地帯がパンジャブ州である。パキスタ

ンの主要産物である綿花、麦、米などを栽培する草原、畑地などが広がっているのは主にこの州である。

パンジャブ州の西部は4千メートルの山々が連なる山岳地帯でラヒールさんは現在この山岳部の行政を担当し、特に山岳民族として知られるバルーチ族の民生の安定にも努めている。電気、水道はもちろん道路もないそうで、寝袋を携えて何日かかけて馬で高度2千~3千メートルまで行き、土地の人々と語り合うという。人々は羊や山羊を飼い、夏は草を求めて山頂近くまで移動し、冬は低地に戻る生活をしている。彼らの主食は羊の肉とミルク。そうした仕事柄からか、単一民族と聞いていた日本、それも北海道が少数民族の暮らす土地と知ってか、研修を修了して帰国する直前、「アイヌ民族の様子が知りたい」と、日高管内平取町の同町立アイヌ文化博物館など訪問した。興味深く解説を聞いたりしたほか、地元の人たちと

歌ったり、踊ったりと楽しい1日を過ごしたようだ。

「客」をもてなす伝統

遠来のお客をもてなすことを大切にするイスラムの伝統は今も受け継がれ、「パキスタンにやって来た知人がホテルなどに泊まったらとても嫌な気持ちになります」と、パキスタンに来るときは連絡するように言われた。「首都にある自分の家、バハワールプールのご両親の家、今の任地デラ・ガジ・カーンの家など全部に泊まって下さい。北部には友人もいるからホテルには泊まらなくてよい」。パキスタンの各地を見て欲しいという。逆に、今回、「札幌でのホームステイはとても嬉しかった!、です」と日本で受けたもてなしを心底喜んで

最後に一言。「日本でニュースを見ているとパキスタンはずいぶん危険な国という印象をもたれているようです。パキスタンは安全です。暮らしや旅行にもお金もさほどかかりません。ぜひ一度来て下さい」と、真剣な表情で話してくれた。

特に北部地方の気候は北海道に似ているようで、冬は雪景色、夏は緑豊かな景色が楽しめるそうである。



話し合いのために一帯の山岳民が集まってくる